

**「小中学生の学びに関する実態調査」速報**

## 小学生の40%、中学生の55%が、「上手な勉強のやり方が分からない」 成績上位で学習時間が短い子どもは、答え合わせをした後に解き方や考え方を確かめる

株式会社ベネッセホールディングス(本社:岡山市)の社内シンクタンク「ベネッセ教育総合研究所」では、全国の小学4年生から中学2年生の子どもとその保護者5,409組を対象に、「小中学生の学びに関する実態調査」を行いました(2014年2月~3月実施)。

PISA(OECD 生徒の学習到達度調査)の結果では、日本の子どもたちの学力は回復傾向にあるものの、学習意欲に課題があることが指摘されています。主体的に学ぶ力を身につけるためには、「何を学ぶか」(学習内容)に加えて、「どう学ぶか」(学習方法)を考えることが重要ですが、よい学習方法がわからないという悩みを多くの子供が抱えている実態もあります。そこで今回は、学年別の子どもたちの学習に関する意識・実態と、それに対する保護者のかかわりの両方を明らかにし、「よりよい学びのあり方」を検討することを目的に調査を行いました。

本調査の主な結果は、以下の通りです。

※文中の「小学生」…小4生~小6生の平均、「中学生」…中1生~中2生の平均

※文中の「成績上位」「成績下位」…保護者の評価や子どもの自己評価により、成績を「上位」「中位」「下位」で3区分

1. 「上手な勉強のやり方が分からない」のは小学生で約40%、中学生で約55%。
  - 学習の悩みについて、「上手な勉強のやり方が分からない」を選択した小学生は39.9%、中学生は54.7%であった。また、「成績上位」の中学生も約30%が選択した。「やる気が起きない」(小学生39.8%、中学生55.5%)の悩みをもつ割合も、中学生になると半数を超える。
2. 「成績上位」の子どもほど1日の学習時間が長い。ただし、「成績上位」の子どもであっても、小学生約6割、中学生5割が、1時間以下程度の学習時間であった。
  - 成績別の子ども1日の学習時間をみると、小学生の「成績上位」は1時間38分、「成績下位」は1時間7分、中学生の「成績上位」は1時間35分、「成績下位」は1時間13分である。「成績上位」の子どもは「成績下位」の子どもに比べて、平均で20~30分程度学習時間が長い。
  - ただし、「成績上位」の子どもであっても、小学生で約6割、中学生で5割が、1日の学習時間が「1時間くらい」以下である。
3. 「成績上位×学習時間短い」中学生は、「成績下位×学習時間長い」中学生と比べて、学習方法の項目で、最大20ポイントほど上回った。
  - 「成績上位×学習時間短い」子どもは、「成績下位×学習時間長い」子どもと比較して、「何が分からないか確かめながら勉強する」で19.9ポイント、「〇つけ(答え合わせ)をした後に解き方や考え方を確かめる」で21.4ポイント上回った。
4. 「新しいことを知ることができてうれしいから」勉強する子どもは、小学生から中学生で22ポイント減少。
  - 勉強する理由の第1位は、小学生では「勉強しないといけないと思うから」(76.3%)、中学生では「将来いい高校や大学に入りたいから」(78.4%)であった。「新しいことを知ることができてうれしいから」という理由は、小学生は65.5%だが、中学生になると43.5%で、22ポイント減少する。
5. 学びの面白さを伝える保護者の子どもは、そうでない保護者の子どもより、好奇心や関心を動機として学習をする割合が、10ポイント以上高い。
  - 保護者が子どもに「算数/数学の考え方や解き方の面白さを伝える」家庭では、子どもが学習内容に対する好奇心や関心を動機として学習をする割合は小学生34.9%、中学生35.2%と、そうでない場合の小学生24.4%、中学生23.7%と比較して、10ポイント以上高い。

本調査では、学習時間を十分に取っている子どもほど学業成績がよいという結果が明らかになりました。学習の「量」と「成績」は、ある程度比例します。この意味で、一定の学習時間を確保することは、学力を高めるのに重要な要素といえます。しかし一方で、相対的に短い学習時間でも、学習方法の工夫によって成果を上げることが可能だということも実証されました。学習の「量」を増やすだけでなく、学習の「質」を改善していくことも、学力を高めるために重要だということがわかります。

「上手な勉強のやり方が分からない」という悩みを抱えている子どもが多いという実態もあります。本調査では、小学生の約 40%、中学生の約 55%がそうした悩みを示していました。学習方法について体系的に学ぶ機会は少なく、それぞれの子どもは試行錯誤しながら身につけていきます。しかし、思うように効果的な方法が身につけていないという実感が、多くの子どもたちにあるようです。教育心理学における「自己調整学習」の領域では、主体的に学ぶ力を身につけた学習者が備えている要素（「メタ認知(自己理解)」「学習意欲(学習動機づけ)」「学習方略」）や、それらの要素がどのように学習サイクルの循環を支えているかについて数多くの知見が蓄積されています。そうした知見を活用しながら、子どもたちが学習方法を意識し、身につけていく機会を作っていく必要があります。

また、本調査では、保護者のかかわりが重要であることが改めて示されました。保護者のかかわりは、子どもの学習意欲や学力形成に影響を与えています。その影響の仕方は小学生と中学生で異なる部分もあり、発達段階に合わせたかかわりが求められるといえそうです。

子どもがどのように「よりよい学びのあり方」を考え、具体的な方法を身につけていくのか。さらに、保護者や教員はそれをどのようにサポートしていけばよいか。そうした学習の「質」を改善していく試みは、子どもの教育に携わるすべての人が考えるべき課題です。ベネッセ教育総合研究所でも、本調査の結果を参考に、「よりよい学びのあり方」について深く考えていきたいと思えます。

## ■調査概要

調査テーマ	小中学生の学びや保護者の関わりについての意識と実態	
調査方法	郵送法による自記式質問紙調査	
調査時期	2014年2月～3月	
調査対象	全国の小学4年生～中学2年生の子どもとその保護者 5,409組 (小学4年生～小学6年生 3,450組 中学1年生～中学2年生 1,959組) *サンプリングの詳細については、ベネッセ教育総合研究所ウェブサイト掲載の「 <a href="#">調査速報版</a> 」をご参照ください。	
調査項目	<b>【子ども調査】</b> 勉強の好き嫌い／好きな教科／学校での学習態度や家庭での学習習慣／家庭での勉強時間／成績への自己評価（中学生のみ）／勉強方法／勉強方法を教えてくれた人／勉強する理由／学習に対する考え／学習上の悩みなど <b>【保護者調査】</b> 子どもの勉強へのかかわり／1ヶ月の教育費／子どもと一緒にすること／子どもの成績への評価（小学生のみ）／子どもに身につけてほしい力／子どもの学習に関する悩みや気がかり／社会観や価値観／学習に対する自身の考え／子どもの生活や勉強への満足度など	
調査協力者	伊藤崇達（京都教育大学 准教授） 須藤康介（明星大学 助教）	外山美樹（筑波大学 准教授）

## ■主な調査結果

1. 「上手な勉強のやり方が分からない」のは小学生で約 40%、中学生で約 55%。

図 1-a 学習上の悩み (学校段階別)

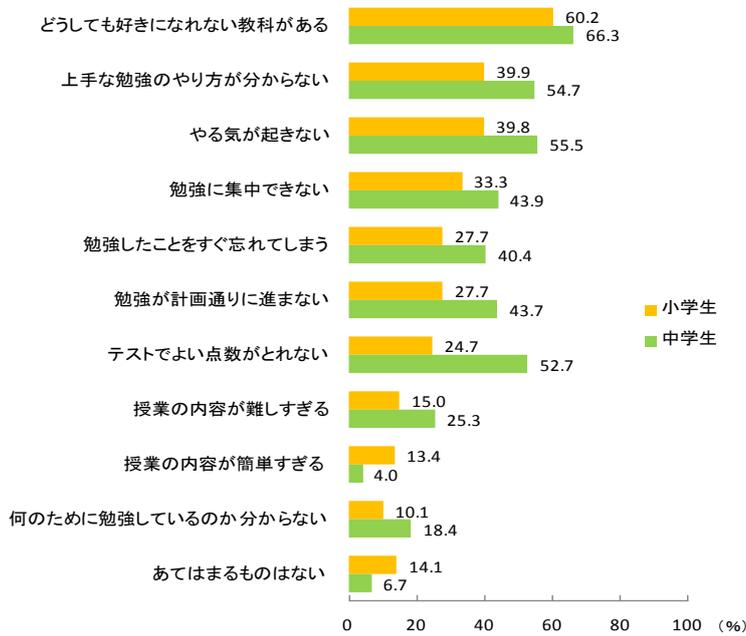
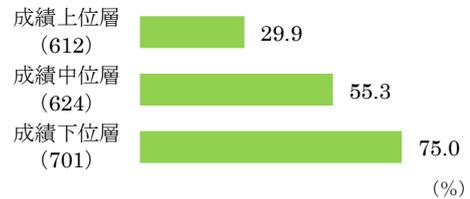


図 1-b 「上手な勉強のやり方が分からない」 (成績別・中学生)



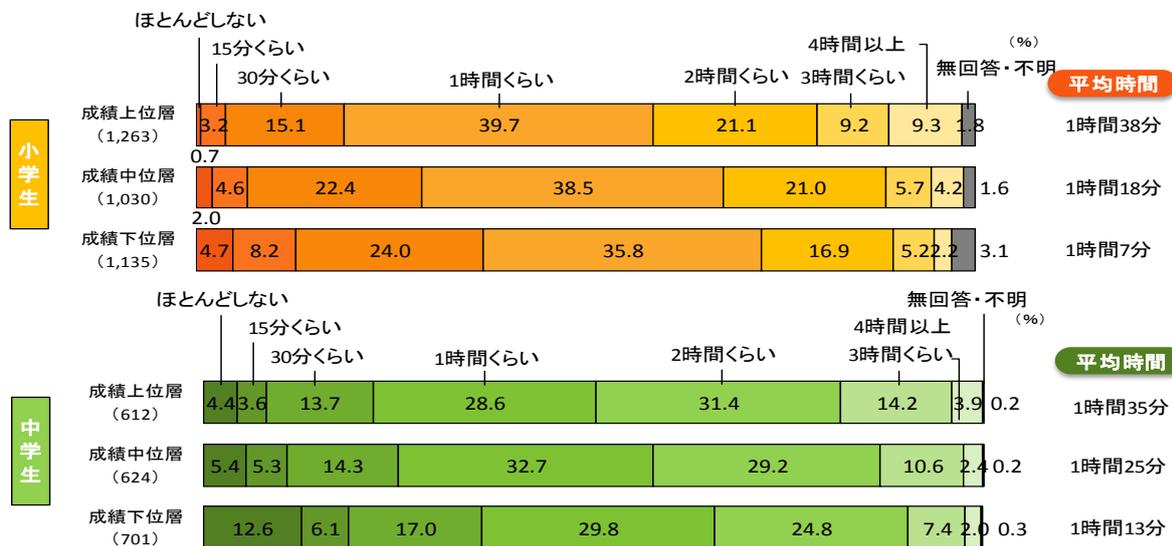
注 1) 複数回答。

注 2) 中学生の成績の 3 分類は国語・数学・英語・理科・社会の成績の自己評価から得点を算出し、さらに成績「上位層」「中位層」「下位層」に 3 分割したものを。

注 3) ( ) 内はサンプル数。

2. 「成績上位」の子どもほど 1 日の学習時間が長い。ただし、「成績上位」の子どもであっても、小学生約 6 割、中学生 5 割が、1 時間以下程度の学習時間であった。

図 2 平日の家での学習時間 (学校段階別・成績別)



注 1) 塾や家庭教師について勉強する時間を含む。

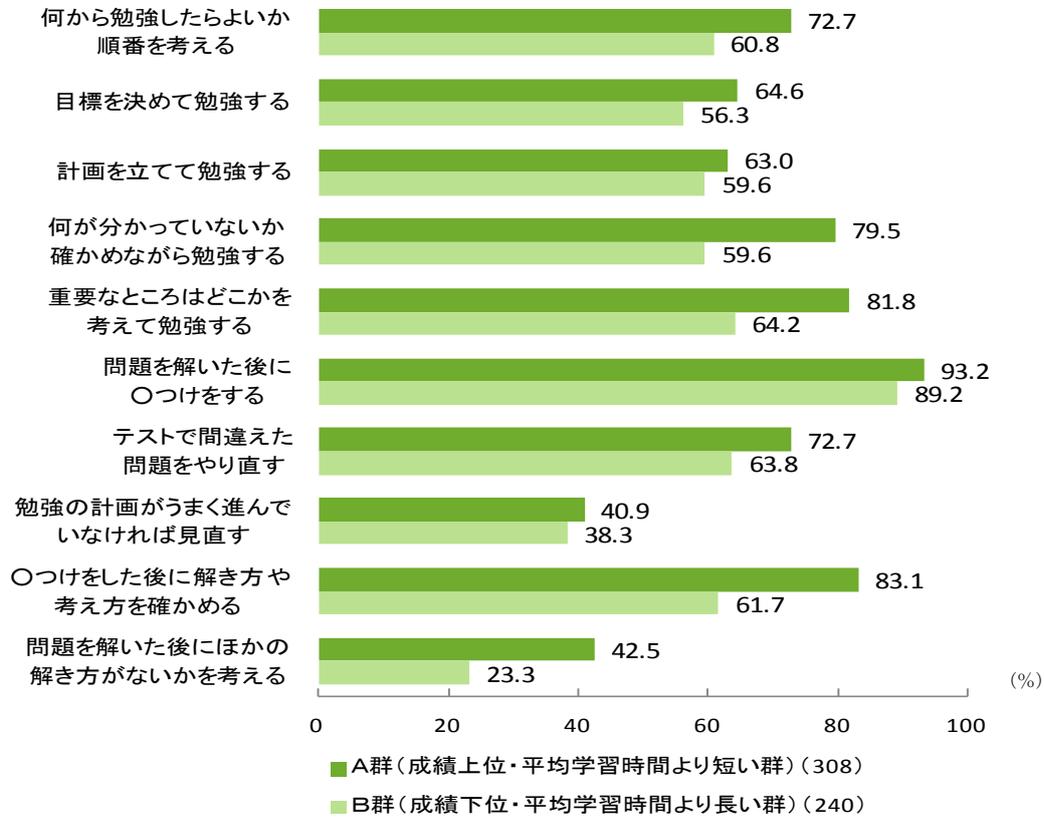
注 2) 「4 時間以上」は「4 時間くらい」+「5 時間くらい」+「6 時間以上」。

注 3) 平均時間は「ほとんどしない」を 0 時間、「15 分くらい」を 15 分、「5 時間くらい」を 5 時間、「6 時間以上」を 6 時間のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注 4) 成績の 3 分類は国語・算数(数学)・英語(中学生のみ)・理科・社会の成績の評価から得点を算出し、さらに成績「上位層」「中位層」「下位層」に 3 分割したものを。

3. 「成績上位×学習時間短い」中学生は、「成績下位×学習時間長い」中学生と比べて、学習方法の項目で、**最大 20 ポイントほど上回った。**

図 3 学習方法(成績×平均学習時間 中学生)



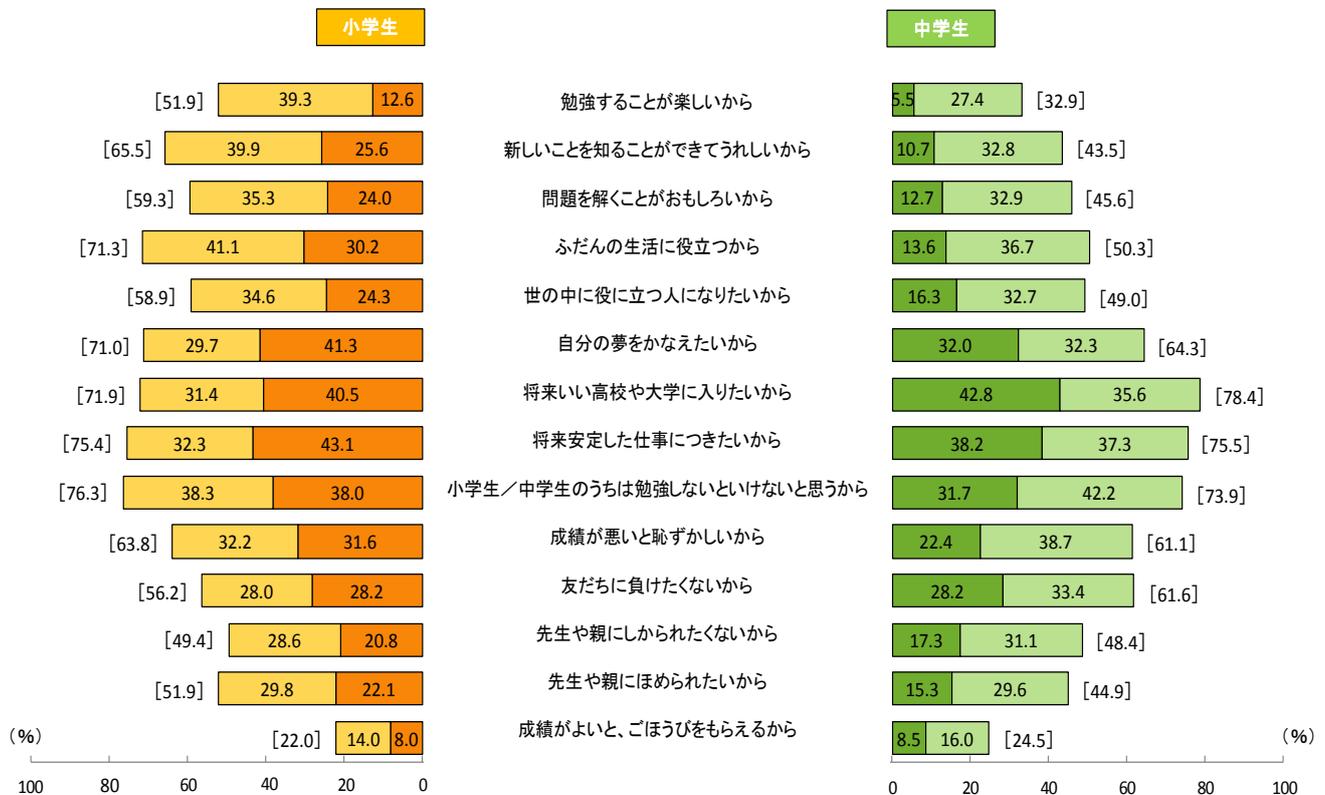
注 1) 「よくある」+「ときどきある」の%。

注 2) 成績の自己評価から総得点を算出し、さらに「成績上位」・「成績中位」・「成績下位」と3分割した。

平日の家での学習時間「ほとんどしない」「15分くらい」～「6時間以上」から平均学習時間を算出し、「平均学習時間より長い群」と「平均学習時間より短い群」と2分割した。成績と平均学習時間とかけ合わせた6群のうち、「成績上位・平均学習時間より短い群」と「成績下位・平均学習時間より長い群」の数値を図示した。

#### 4. 「新しいことを知ることができてうれしいから」勉強する子どもは、小学生から中学生で22ポイント減少。

図4 勉強する理由(学校段階別)



注) 各横棒の外側にある数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

**5. 学びの面白さを伝える保護者の子どもは、そうでない保護者の子どもより、好奇心や関心を動機として学習をする割合が、10ポイント以上高い。**

図5 保護者のかかわりと子どもの動機づけとの関係(学校段階別)



注 1)「学習内容に対する好奇心や関心を動機として学習する高群」:「調査速報版」(p21)においては、「内発的動機づけ(3段階)」のうちの「高群」であること。子ども調査票・勉強する理由について「勉強することが楽しいから」「新しいことを知ることができてうれしいから」「問題を解くことがおもしろいから」の3項目から得点を算出し、得点分布が「高群」「中群」「低群」で均等になるように3分割した。ここでは、「高群」のみを図示した。

注 2)「あてはまる」は保護者の子どもとのかかわりについて「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した人、「あてはまらない」は「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人を示している。また無回答・不明を除外して数値を算出している。

注 3) ( )内はサンプル数。

<ベネッセ教育総合研究所の活動/ウェブサイトについて>

ベネッセ教育総合研究所では、今後も、時代の変化に即したテーマで、子どもや教育に関する、調査や研究活動を行い、その結果を広く社会に開示することで、さまざまな方々との議論の輪を広げていきたいと考えています。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) では、今回の調査データのほかに、さまざまな独自調査のデータ・報告書を公開しています。